

にしたのは誠にこの缺陷を補ふものにして世に推奨するに憚らぬものである。而して本書に於ける著者の志も一面はそこにあつたに信ぜられる。何となれば近時多くの論者が維新の第一原因として擧ぐる經濟的社會的理由は著者が以て第二に置かんとする所である。著者に従へばそれらの理由は勿論閑却すべからずとするも主因としては寧ろ外國勢力の刺戟を擧げねばならぬ。この主因をめぐつて江戸時代そのもの、含む矛盾社會上に於ける朝廷と幕府思想上に於ける尊王攘夷と佐幕開港政治上に於ける鎖國政策と非戰政策等到底融和し得ざるもの、衝突を見その解決として要求せられ又實現せられたものこそ維新に外ならぬとするものである。かくの如き見解が果して彼の社會的經濟的見解と兩立し得ざるものなりや否やはなほ考究の餘地ありとするも、近時國史に對する唯物史觀の適用が聊か其度を過ぐるの感あるに當つて本書の世に出でたのはそれらの學徒にまつても有力なる他山の石として傾聽すべき價値は充分にあると思ふ。一般歴史愛好者にまつても幕末史を鳥瞰し得べき近來の好著た

るこゝ勿論である。著者はなほみづから維新全史の完成を期して居るに云ふが、切にその實現を祈る次第である。(菊版六九二頁、價五・八〇、東京紀元社發行)(肥後)

● 法制上より觀たる日本農民の生活(律令時代)下

法學士 瀧川政次郎著

律令時代に於ける農民の生活を主として法制上より觀察して、上卷には其收入の方面を詳述したのであるが、本卷に之に對して支出の方面を觀察し、結論を下したものである。

第一章「租稅制度並ひに兵役の制度より觀たる農民の生活」に於ては、田租・徭役・調庸・雜稅を檢討し、標準房戶の租稅負擔による支出を概括し、田租は輕かつたが、調庸は比較にならない程の過重であつた上に、頗る重い雜徭や雜稅が課せられ、その總和は口分田として受ける田地の總收入の大半に達したらしいが、その口分田の收入も彼等の生活を支ふるに足らなかつたから、彼等は各種の手段を講じて脱稅を計つたのであると斷じ、脱稅行

篇を述べて居る。

第二章「地方行政制度より觀たる農民の生活」に於ては主として綱紀の弛廢による國司の荒政を説き、我國法制そのもの、缺陷は農民の生活を脅すに充分であつたけれども、更に猛惡なる地方官によつて行政事務が執行された爲め制度の破綻を生じたに論じ、莊園制度の發生、武家の勃興は、社會上、經濟上、必然の歸終であるに結んで居る。

その引用する所、六國史・律令格式、正倉院文書・西宮記以下の文書記録文集は勿論、物語類歌謠にも及び、それらを極めて自由に驅使して立論し、明治大正期を通じての著書・論文を参照して之を補ふたもの、その煩雜極なき時代の、しかも史料少き下層社會の研究に、かくまでの成果を擧げられた著者の學識と努力とに對して、今更ながらの敬意を表する。(菊版四六五頁、索引四一頁、價四・二〇、東京同人社發行)

● 日支交通史 下編

木宮 泰彦著

先年その上編が刊行せられて以來、下編の發兌が一日も早く完成し、可なり難澁な方面の研究が首尾を整へる日を期待したのであつたが、最近その渴望が醫された事は何よりの悦びであらねばならぬ。その上編は北宋との交通を以て終つたに續いて、下編は南宋との貿易から筆を起し、それについて、元明、清との交通貿易を詳細に述べたものであるが、特に著者は、それを單なる交通史とは取扱はずして、彼國の文化移植になみ／＼ならぬ努力を盡して居るのであるから、書名は「日支交通史」といふけれども、その内容は寧ろ支那文化の日本輸入史とも言ふべきである。それは本書の有つ第一の誇であらう例へば、入宋僧や歸化宋僧の宋文化移植に八十頁を盡し歸化元僧及び入元僧の元文化移植に百頁を盡し、入明僧來朝明人の明文化移植に約五十頁を充てたが如き、たしかにその努力の表はれであらうと思ふ。殊に入元僧の史籍に残れるを探求し、彼等の遊歴地を辿り、將來品を調べ、彼等入元の目的は必ずしも參禪辨道のためのみではなく、漫遊的氣分に驅られた結果である事を指摘し、其

支那に行はれた文學、淡酒な書風・清雅な墨繪を將來し得たのみならず、又寺院制度をも輸入して五山十刹を設置し、安國寺利生塔を建立し、更に唐様の茶會が日本化され喫茶の風習までも將來した事を言つた點や、來朝明人のために鏤刻の業が異常に進歩した事、歸化明清人が我が醫學に貢獻した事を力説した點は、また本書の長所であらう。

政治方面に關しては、忽必烈が我國に送つた國書は決して單なる和親修交のみのもではなく、我國に對する威嚇であり暴戾であるとして栢原氏の説に反對した點、天龍寺船に入明僧の便乗するものも多く、また彼地の高僧を招致する事も、當時交通の一目的であつたと言へる點等、列擧に遑がない。なほ、入元僧一覽表とか日明使節來往一覽表の如き一覽表を隨所に入れ、卷末に年表並索引を附せられた事は讀者をして理解を容易ならしめる事極めて大であつて、著者の周到なる用意に感謝するものである。たゞ望蜀の言を許さるゝならば、蒙古襲來が我國精神に與へた影響さか、倭寇と秀吉の海外經營との

關係さか、對清貿易によつて輸入せられた西洋文明さか、いふ方面——それは本著の直接目的ではないにしても、一言それらに觸れてほしいと思はれたし、また宋元文明の輸入に際して、「無盡」の如き經濟策の將來せられた事も教示してほしかつた。(菊版六七三頁、索引二三頁、口繪九葉、價五・八〇、東京金刺芳流堂發行)〔以上中村〕

●高 島 郡 志

滋賀縣高島郡教育會編

近江高島郡志一冊分て三篇とす。地誌、沿革、郡治これなり。本文一一三頁寫眞二十二枚、地圖一葉より成る。嘗ては中江藤樹淺見綱齋馬場正通等の先覺を生める郷土は其全き姿に於て世に示されたるなり。三浦博士の序に「よく本郡に於ける古來各方面の沿革を提要し殊に藩治時代の煩瑣なる税制、人口の増減、明治以來の急激なる變革等に至る迄微を穿ち細を析ちて歴史的本郡の眞面目を描寫す」といへるもの必しも過譽といふべからず思ふに本郡の如きは湖山の間狭小なる地積を占め山地